講演会費	50,000	50,000
事務費	140,000	149,249
通信費	80,000	81,580
印刷費	60,000	42,800
予備費	92,008	0
合計	452,008	370,109
当期運営残高	△94,008	△ 6,571
前期繰越金	94,008	94,008
次期繰越金	0	87,437

○1977年度事業計画案

(1) 支部総会……1回
(2) 運営委員会……2～3回
(3) 幹事会……数回
(4) 支部研究発表会……1回
(5) 講演会……1～2回
(6) 20周年記念講演会……1回
(7) 研究会……数回
(8) 見学会……1～2回
(9) 懇親ハイキング……1～2回
(10) 懇親会……1回
(11) 支部会員名簿の作成……1回
(12) 支部ニュースの刊行……12回

○1977年度収支予算案

1977.3.1～1978.2.28

収入		支出	
科目	予算	科目	予算
前期繰越金	87,437	会議費	35,000
本部交付金	358,000	講演会費	50,000
		事務費	150,000
		通信費	80,000
		印刷費	60,000
		予備費	70,437
合計	445,437	合計	445,437

○1977年度役員

支部長　依田　浩(名古屋工業大学)
副支部長　飯原慶雄(南山大学)
運営委員　天野菊彦(中部品質管理協会)，岩田怜(名鉄コンピュータ・サービス)，伊藤一夫(東海銀行)，飯田次生(日本碍子)，木村修(トヨタ自動車工業)，田中庸平(中部電力)，中川覃夫(名城大学)，日比野康文(愛知学院大学)，平石義則(神鋼電機)，福村晃夫(名古屋大学)，藤波健(東邦ガス)，福田治郎(岐阜大学)，藤本憲雄(三菱重工業)，妙見孟(名古屋市立大学)，村田秀雄(仙波特許事務所)，本告光男(中部電力)，山田英夫(三菱自動車工業)，山下照(トヨタ自動車工業)，山本勝(名古屋工業大学)，吉野玄一(日本電信電話公社)
監事　沢　嘉也(名城大学)，内田欣一(日本電信電話公社)
幹事　天野菊彦(中部品質管理協会)，久野源三(中部電力)，中川覃夫(名城大学)，山本勝(名古屋工業大学)
顧問　小野勝次(名古屋大学)，西沢勇(中日新聞社)

ルポ

SSOR

若山邦紘

SSORという会が毎年夏の終わりごろに開催されるようになって，今年で13年目(50年はIFORSのため休会)になりました．参加メンバーは若手の研究者を中心に企業のORワーカー，それに大学院の学生です．今年は神戸商大の真鍋さんと竹田さんが事務局となり，兵庫県の加西市にある「いこいの村はりま」で第12回目の会合がありました．80名という大世帯でしたが，勉強も適当にさせていただきましたし，みなさんに遊んでもいただきました．また，帰りには姫路工大の寺岡さんの案内で姫路城も見学してきました．

第1回のSSORは昭和40年の8月末に飛騨高山で開催されましたが，38年ごろに小笠原先生(当時神戸商大，現在兵庫県教育長)が森村先生(東工大)，渡辺先生(現筑波大)，関根先生(慶大)といったほぼ同年代の先生らに，合宿をしてみんなで仲よくしたいと相談をされたそうです．そのころ，すでにPSGという確率，統計関係の若手の研究者の会があって活動していましたが，ここではORのことまでカバーできないので，ORをやる者だけが集まってPSGのようなことをやりたいという動機もあったようです．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

しかし，このような会を開催するためには若い幹事役が必要ということで，柳井さん(慶大)に白羽の矢が立てられました．39年に「今年はまだ無理だなア」と話し合ったということですが，40年になって実現の運びとなり，その準備会を統数研の渡辺先生の部屋で森村先生ら数人が集まってやりました．そこで，会の名称をどうしようかということになって，Seminar on OR で SOR という案がでたところが，渡辺先生の手帳にＳＯＲという略号があったので，もう1つＳをつけて SSOR にしたらどうかということになりました．それなら最初のＳは何かというと Summer Seminar のＳと思えばいいが，夏にしかやれないのは困るだろうというと，Seasonal とすればいつでもできるだろうとか，また，セミナーというと日科技連のセミナーなんかを思い出してしまうといえば，Symposium のＳと思えばよかろうというわけで，結局，SSOR ということに決定したのです．したがって，SSOR というのは略称ではなくて正式の名称で，意味づけはいろいろとできるというきわめてユニークな名称なのです．

第1回の SSOR では Zoutendjik の "Method of Feasible Directions" を勉強の材料にしました．各大学やグループ別に担当の章をきめて発表の準備をしました．参加者は34名でしたが，4泊5日の充実した合宿ができました．発表は主にわれわれのような学生がいけにえになりました．現在の学生さんは大変積極的ですが，われわれは純真でしたから，よその大学の先生の前でしゃべることは大変なことでした．SSOR のよさはアカデミックな面だけにとどまらず，きわめて幅の広い付き合いができることです．小笠原，西田(当時甲南大，現在阪大)両先生は麻雀の鬼ですし，古林さん(現埼玉大)はブリッジの権化です．発案者の考えたとおり，参加者は大変仲よくなりました．私自身も10年以上ふりかえってみて，SSOR で知り合った方々とは格別なるお付き合いをしていただいています．

回	メインテーマ	輪講に使用した本，その他
1	数理計画	Zoutendjik, "Method of Feasible Directions"
2	ネットワーク	Ford, Fulkerson, "Flows in Networks"
3	確率過程，他	Prabhu, "Stochastic Process"
4	確率過程，他	Kemeny, Snell & Knapp, "Denumerable Markov Chain"
5	信頼性	Barlow & Prochan, "Mathematical Theory of Reliability"
6	組合せ理論	Hall, "Combinatorial Theory"
7	最適化	Leuenbarger, "Optimization by Vector Space Method"
8	いろいろ	河田龍夫先生特別講演
9	いろいろ	小野勝次先生特別講演 ワークショップ形式
10	いろいろ	しっかりとした予稿集を用意
11	多目的計画，他	コーディネータによるミニシンポジウム形式
12	マトロイド，他	同上

その後，何年かの間は毎年1冊ずつ読む本をみんなできめました．第2回は Ford, Fulkerson の "Flows in Networks"，第3回は Prabhu の "Stochastic Process" といった具合です．東工大の森村研には毎週土曜の午後になると，このための輪講に慶大，大手町グループ(旧三菱原子力，電力中研)，防大などいろいろな人たちが集まってきました．

なんでもそうですが，数年もたつとマンネリ化するものです．一時は参加者数も90名を越し，ちょっとばかりまとまりが欠けることにもなりました．そこで，年少者組を別につくれとか，いったん解散してしまったほうがいいとか，古いメンバーは自主的に引退しなさいとかいう議論があったりし，いろいろと紆余曲折もありました．しかし，当番事務局のプログラムに対する創意工夫も見られました．たとえば，第8回には河田龍夫先生を，つづいて第9回には小野勝次先生をお招きして，講演をお願いしたこともありました．若い者にとっては，大先生と酒を飲みながら話をすることのほうが有意義だったかもしれません．大先生にとりましても，孫弟子たちとの合宿生活を十分に堪能されたことと思います．また，IFORS の形式をまねてテーマ別にワークショップをやったこともありました．

昭和50年は日本で IFORS と TIMS の大会がありました．SSOR の中心メンバーは大体が国際会議の準備で忙しくなることが予想されましたので休会しました．昨51年から復活しましたが，メンバーもずいぶん新陳代謝し，平均年齢も一時よりずっと若くなりました．

山本さん(法大)，真鍋さんといった全回出席を誇る古強者もいますが，SSOR も第2世代の手に移ったといってもよいでしょう．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．